

\*\*\*\*\*

日本デザイン学会第53回春季研究発表大会

オーガナイズドセッション 3:

「基礎教育としてのデザイン＝感性と知性を育む芸術教育の再生」

7月2日 14:50～16:40

北陸先端科学技術大学院大学 隣接 石川ハイテク交流センター

関連HP <http://www.jaist.ac.jp/ks/labs/nagai/jssd2006/index.html>

\*\*\*\*\*

1998年、ゆとり教育を掲げて学習指導要領が改訂された直後から、次の基礎教育の枠組みの検討が進んでおり、2003年には、ゆとり教育から学力向上路線へ舵を切るようなかたちで中央教育審議会の答申が出されています。さらに2005年10月の答申では、はっきりと「ゆとり教育」に対する「たしかな学力」を育てることを明言しており、学習の目標を「生きる力」と定めています。

こうした流れの中で、芸術教育は学力重視の波を受け、「ゆとり教育」の枠に押されてその姿を変えてきました。

一方で、戦後の教育指導要領に現れた芸術教育の特徴は、「生活に役立つ」「豊かな人間性を養う」といった人格形成に対する影響を意識したものから、昭和50年代以降の「楽しい造形活動」「造形遊び」といった、より個人的なものに変化してきています。

今回の答申を巡って交わされた意見を読むと、「豊かな人間性と感性の育成」に関するものの中に、「感動を伝える」という本来の目的の他に、「生きる知恵のひとつとして」、「学校教育の中での潤い」、「生涯楽しむために」といった意見が列挙されているのと同時に、「選択制にして、選択した者には倍の時間を学ばせる」「芸術を国家で議論するのは難しい」などの意見も見受けられます。

ここには、芸術を情操として捉える見方と、特殊な技能として捉える見方が相俟っており、生活や社会に必要な要素としての芸術という見方が薄いことが見て取れます。

イギリスにおけるデザイン教育のように、芸術教育を社会とのつながりにおいて考えた場合に、創造と理念の融合であるデザインは、感性教育のひとつの面として十分に「生きる力」を育む手段となり得るといえるでしょう。

このセッションでは、芸術教育、デザイン教育、感性教育、教員教育の立場から、基礎教育課程における芸術教育・デザイン教育の意味を問い直してみたいと考えます。

\*\*\*\*\*

セッションの発表者と発表テーマ

\*\*\*\*\*

山口喜雄先生（宇都宮大学、発達と感性）

君島昌之先生（東京純心女子大学，デザイン学会教育研究部会）

長田謙一先生（首都大学東京，デザインと芸術基礎教育）

山中敏正（筑波大学，オーガナイザー）

\*\*\*\*\*